

原稿用紙が3枚書けるようになる



はじめに

誰だって書くのは苦手です。みんな、同じです。「書けないッ!」「苦手ッ!」なのです。

プロの作家ですら、みんなそうです。重荷を背負った山登りのように、放り出したくなる気持ちをなだめ、「大丈夫、大丈夫」と自分を励まして書いているのです。サラサラ、スラスラ書いているように見える作家たちも、原稿用紙は赤字だらけでした。井上ひさし、野坂昭如、五木寛之みんなそうでした。

文章はどうしてこれほどやっかいなのでしょう。

おしゃべりなら快調にとばせるのに、書くとなると急に固まってしまう。しまいには、「ダメだ。才能がない」と投げ出す。でも、ちょっと待ってください。さっき挙げた大作家だって、たいへんな努力をして書いているのですよ。いいですか、「書くこと」は、まったくもって後天的な訓練作業です。ここであきらめてしまうか、それともなんとか書く努力を続けるか。たったそれだけの違いだと思います。特別、あなただけが「苦手ッ!」なわけではないのです。書きましょう。あなたに「書く」気になってもらわないと始まらないのです。

どうしたら書く気になってもらえるだろう。考えました。そして、いかにもテキストらしい文体はやめることにしました。「ああ、こんなふうには書けばいいのか」「なーんだ、これなら自分にも書けそうだ」、そう思ってもらいたいからです。

本文は第Ⅰ部、第Ⅱ部合わせて19の節から成っています。できれば、1つの節を2回読むことをお勧めします。1回目は、スラスラとリズムに乗って。そうです、文章のリズム、呼吸を肌で感じてほしいのです。2回目は、何かを盗むつもりで読んでください。たとえば比喩。たとえば引用の仕方。文章表現を豊かにする技法を見つけてください。真似して結構です。盗んで書いて、真似して書いて、自分のものにしてください。

「原稿用紙3枚」という言葉から、あなたは何を連想したのでしょうか。あなたは何を書きたいのでしょうか。エッセイですか。いつか作家デビュー、なんて企んでいたりして。素敵です。えっ、やっぱり仕事ですか。報告書、企画書、提案書、社内報の記事、なるほど、書けないと困っちゃいますよね。昇進・昇格の小論文、これも切実ですね。

どれもこれも、ある日突然、書けるようになる特効薬はありません。しかし、「書く」ことは絵画や音楽に比べれば、努力や根気が確実に助けになる分野です。押さえどころさえ心得れば、必ず書けるようになります。さっそく今日から、書き始めてください。

目次

| | |
|---|-----------|
| はじめに | 3 |
| 第Ⅰ部 この基本を押さえれば必ず書けるようになる | 5 |
| 第1章 なぜ書けない——苦手意識の正体を知って克服しよう | 6 |
| 1. 書くこと（文章）としゃべること（会話）の違い | 6 |
| 2. まず書き慣れること以外に道はない | 11 |
| 3. やはり“読むこと”は必要 | 15 |
| 第2章 読み手というお客様の存在を忘れずに | 18 |
| 1. まるで旅する添乗員のように | 18 |
| 2. お客様はやっぱり神様？ | 23 |
| 3. 客は誰？ 読者を絞り込む | 26 |
| 第3章 どうしても書き出せないとき、こんな手もある | 30 |
| 1. 「型」に当てはめて文章を組み立ててみる | 30 |
| 2. パソコンなら遠慮なく「書きまくれる」 | 36 |
| 3. 声を出して読んでみよう | 39 |
| 第Ⅱ部 いい文章を書くためのステップアップ・トレーニング ... | 41 |
| 第1章 豊富なデータ、強靱な論理、文学的表現 | 42 |
| 1. そもそも「いい文章」とは？ | 42 |
| 2. 新聞のコラムの論理を解剖してみる | 45 |
| 3. スッキリした文章で「文学的」な美しさを表現しよう | 51 |
| 第2章 文章表現を磨き上げる実践テクニック | 56 |
| 1. 主語と述語をなるべく接近させる | 56 |
| 2. 接続詞、副詞を効果的に使う | 60 |
| 3. 句読点の打ち方、段落の原則 | 63 |
| 4. 読みやすくする工夫とテクニック | 65 |
| 第3章 狙いを定めた「実務文章」のポイント | 70 |
| 1. データが命の「報告書」にも付加価値を | 70 |
| 2. 採用！に持ち込む「企画書」「提案書」 | 73 |
| 3. 「小論文」で高評価を得るためのポイント | 75 |

No.

第 I 部

**この基本を押さえれば
必ず書けるようになる**

第1章

なぜ書けない—— 苦手意識の正体を知って克服しよう

1

書くこと(文章)と しゃべること(会話)の違い

◆ 最初から得意な人はいない

文章は苦手！ これは当たり前のことで、多くの人が心の片隅に抱え込んでいる気分でしょう。

でも、ビジネス界では「書くこと」は必須です。もっと直接的に言えば、「ビジネスとは書くこと」と言っているほどです。

いま、オフィスの机を見渡してみてください。デスクの上、引き出しのなかにあるモノ。そのほとんどが「書く」ための文具や資料ばかりではないでしょうか。ビジネスパーソンとは、四六時中、文書、つまり文章を書いて生業を立てている人種です。

駆け出し記者として、1日のほとんどを県警本部内の記者クラブで過ごしていたころ、そこで聞いた話を思い出します。相手は30歳前後の交通機動隊の巡査でした。

「俺はね、体育会系の人間なんだよ。もともと、ね。書くことなんか根っから苦手。警察に入ったのも文章なんか書かなくていいと思ったからさ。それがどうです、朝から晩までとにかく文章の中に埋まっていますよ。交通事故がある、現場に出かけ実況検分をして帰ってくると、調書にまとめる。これが大変。なにしろ、それから先の検察庁だ、裁判所だ、と事故処理が進むときも、俺たちの実況検分調書が元になるんだから、いい加減に書くわけにはいかないし、交通事故は次々に起こりやがるんで、さっさと仕上げないとたまる一方、たまったもんじゃないですよ。そのうえですよ、係長はここを直せ、ここが足りない、ってガミガミ言ってくる。だから朝から晩まで、いつもいつも文章と格闘しているありさまでですよ。記者さんたちのように記事を書くつもりで新聞社に入った人たちと違って、俺は体育会系ですよ。本当に、こんなつもりじゃなかったのに」

夜勤の彼の話を聞いているところへ、事故発生を知らせる声が室内に響く。

「よし。行くか」

書類を机の上に放置したまま、彼は部屋から出て行った。

つまりは、こういうことなのです。警察官に限らず、仕事というものは、ほとんどの場合、文書によって完結する。文書なしには完結しないと言ってもいいくらいです。

それにもかかわらずです、「書くこと」がいつまでたっても得意になれず、書く段になるといつも気分が滅入るという人が多い。しゃべらせたら、それなりの説得力ある話ができるのに、「わかった。じゃあ、それを文章にして提出してくれ」と言われたとたん、気分が重くなる。どうしてこんなふうになるのでしょうか。

こんな苦手意識をなくす、いいえ、せめて薄めるにはどうすればいいか、まずそこを考えてみましょう。

◆ 同じ道具を使うのに

「書くこと」に比べ、「話すこと」がずっと気楽なのは、何ととっても慣れの違いです。「オギャー」と生まれて人間社会の一員として参加して以来、私たちは四六時中話して生活してきました。だから、意識する、しない、にかかわらず話はそれぞれの人生のなかで磨かれ、鍛えられてきました。

会話も文章も、どちらも言葉という同じ道具を使って意味を伝えます。それなのに、です。会話では気楽に使えている道具が、文章で使おうとするとストレスを感じてしまう。どこに違いがあるのでしょうか。

話はとても自由です。会話、対話にはきちんとした決まりがありません。大事なものは聞^きだけでしょ。周囲の空気を読みながら、接続詞や感嘆詞をほどよく混ぜ、声の高低、大小を調節して、ユーモアや洒落を添え、最後のほうで「要するにね」のひと言で周囲の注目を引き寄せ、ちょっと大げさな表現で締めくくれば、それなりに成立します。気の向くまま、思いつくまま、どこの小路に迷い込んでもいい。というのも、その小路は決して行き止まりにならず、必ず出口があり、出口がなさそうなら、「それはともかく」という便利な言葉でフワリと飛び越えてしまえばいいのです。

私たちの会話はいつだってこうしたものです。決まりがないから、気が楽です。

◆ 会話なら、小学生でも一人前

文字などまったく念頭になかった幼いころから、私たちはしゃべり続けてきました。しゃべりまくってきました。その長い年月が、私たちの会話を磨いてきました。上手、下手を言っているわけではありません。それほど物怖じせずに話しているという意味です。これは案外立派なことです。